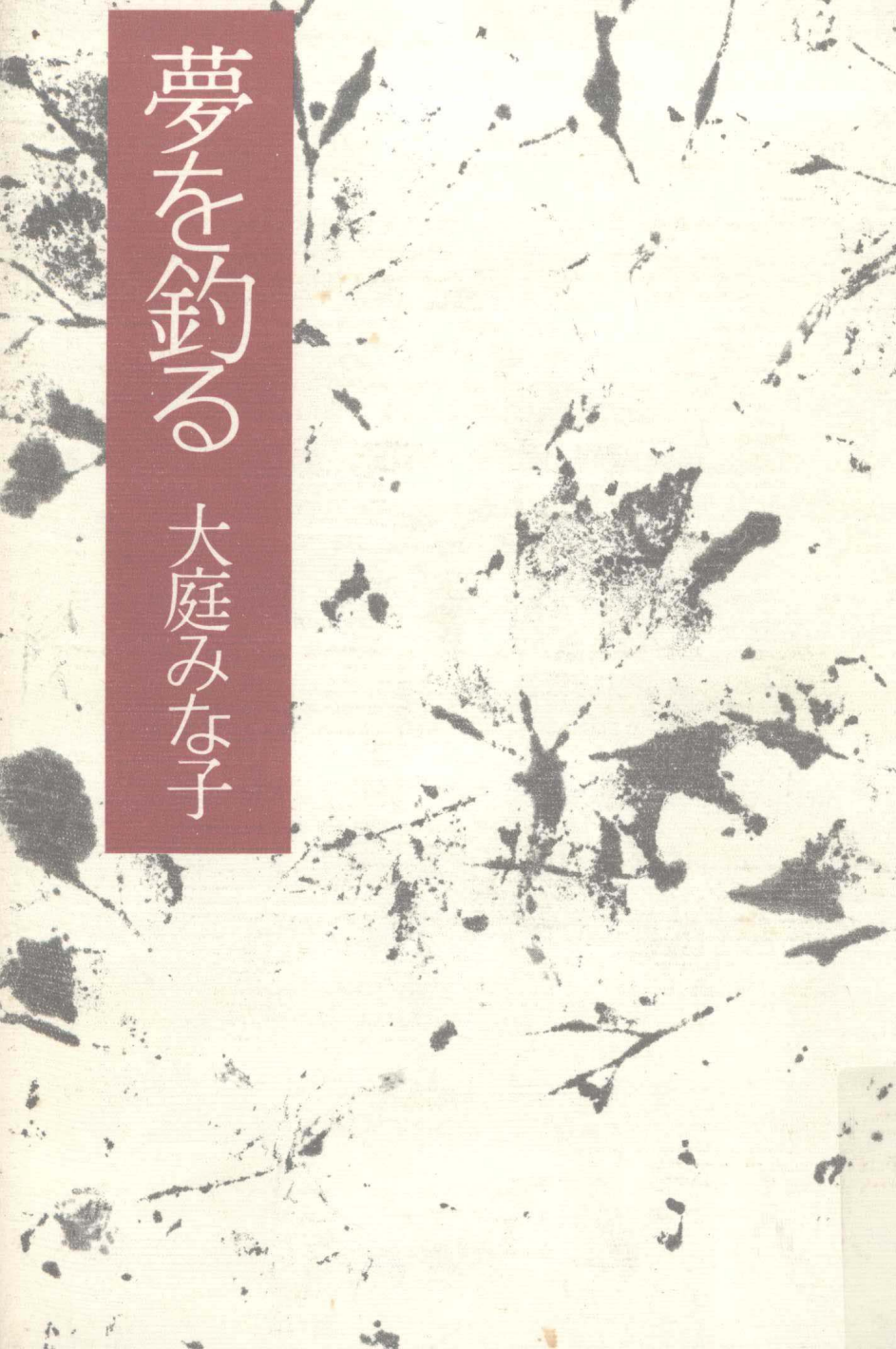




夢を釣る

大庭みな子

夢を釣る

大庭みな子

講談社

夢を釣る

一九八三年一月二十日 第一刷発行

著者——大庭みな子

© Minako Oba 1983, Printed in Japan



発行者——三木 章

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽三—三 郵便番号二三 電話東京三—九四—二二 小本表の振替東京—五〇〇

印刷所——豊国印刷株式会社 製本所——黒柳製本株式会社

定価——一二〇〇円

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-06-200304-X(0) (文1)

夢を釣る・目次

叫び出すほら穴 I 9

文学的 13

魔神 18

有名 23

本の記憶 26

お伽噺 28

わたしの子どもだったころへ遊園地 V 34

夢を釣る 41

何が私を動かしているか 43

II

老子 53

夢かうつつか 56

初めもなく終りもなく 65

私の夢十夜 69

「風の又三郎」、風に似た他者

75

長い思い出

80

蛇と魚

84

野間宏に

90

魔術師

94

連続する発見——小島信夫著「作家遍歴」を読んで——

98

「雨の木」の下で

102

みずみずしい精気

106

藤枝静男と加賀乙彦

108

紫式部

113

こんな感じ

116

共有する記憶

120

J・H・フアーブル著「昆虫記」

124

分野の違う人の言うこと

127

チエーホフの予感

130

	追跡者	132
	長年の宿望が叶えられる	136
	紅	138
	「カミノ・レアル」	142
	精神の長い叙事詩	148
	思い出すままに	151
	すがすがしいもの	158
	フローベールと私	161
	ベルイマン監督の「秋のソナタ」	171
	想像力への願い	175
	わたりむつこさんのこと	178
	異質なもの、文学と政治	181
初出一覧		200

夢を釣る

叫び出すほら穴

いつの間にか「三匹の蟹」の頃から十五年経った。「三匹の蟹」が群像に発表されたのは一九六八年だが、実際に書いたのは前の年の夏である。

その夏、私はシアトルにいて、ぼんやり日本に帰ることを考えていた。そういう日があるかどうかわからない状態だった。

それまで十年近くアラスカの辺地にいて、私は全く文学の上の友人を持たず、従って周囲の誰にも自分の文学のことを語ったことはなかった。

だが、その期間ほど、私は生きている人々の真実の言葉を聞いたことはなかったような気がする。それは多分、私が外国人で、無力で、無防備で、しかも、その共同体で職場と家庭を持ち、無心に人の言葉を聞き、自分も無心な言葉を吐くような暮らし方をしていたからだろうと思う。

私はその異国の小さな町で子供を育てながら、日本語を教えていた。当時は日本人は珍しかったので、いろんな個人的な集まりにひっぱり出され、何人かの親しい友人もできた。

十年ぐらい住めば、町中の主だった人たちの血縁、姻戚関係やら交友関係、それから家族の一人一人の性質や趣味までわかり、三代ぐらい前までの祖先の話から子供たちの将来まで大方想像がつくような、田舎町だった。アラスカ東南部の列島の中に夢のように浮かぶその町の名はシトカと言ひ、アラスカが帝政ロシア領時代、首都であった。

私はとくべつ自分の方から訊き出そうとするわけではないのだが、どういふわけか、異国の友人たちは私に離婚の相談やら、子供たちの結婚のごたごたまで話した。

つまり、私は「王様の耳はロバの耳」と叫ばずにはいられない、王様の耳を見てしまった床屋が首を突っこむ木のほら穴のようなものだったらしい。

私はまるで巫女気取りで彼らに御託宣めいた口調で応対した、要するに、彼らがどっちみちそうしてしまふようなことをほんのちょっとほめかしたただけだ。

私は彼らの利害関係に全く無関係だったし、それに性来口が固かった。

その代り、私もまた彼らと同様、「王様の耳はロバの耳」と文学という木のほら穴の中で叫ぶようになつたわけである。

すべての言葉は私的な意味から人間的な意味に移行したときしか文学にならない。

「三匹の蟹」を書いたのは、三十五歳のときだが、小学生の頃から私はお話を書き始めたから、呆れるほど長い間、飽きもせずにぶつぶつ言っていたものだ和我ながら感心している。近親の者に言わせると、誰も聞いていないものをそんなに長期間たった一人で言っているのはどう考えて

も精神病だということである。きっとそうに違いない。

書いているときは一時的に精神病であることは、私に限らず全ての作家がそうであろう。

もちろんその頃書いたものは、今読んだら羞ずかしさの余り、跳び上って壁の中に頭を突っこみたいくらい下手くそなもののだが、それでもそのうちの何百枚かは、発表の機会を得てからの数年を支える貴重な資料になった。

今もってさして上手にもなっていないから、もしもう十年くらい書き続けることができて、今書いているのを読めば、やっぱり跳び上って頭をかかえてうずくまりたくなるであろう。

しかし、若いときの作品はどんなに下手でも、後になればそうは書けない力もあるから、それはそれでよいのだろう。

そんなふうに独りで書いている間、私はそれをべつに無理矢理発表できなくても、かまわないように思っていた。だから、自由に何でも書けた。その後、発表するようになってから、ある部分を取りつくりたりして、かえってつまらないものになったかもしれない。

その十年間は、私の人間に対する柔軟性と、孤独に耐える力を養ってくれたような気がする。途方もない想像力を孤独にひろげて深める持続力を幾分か得た。外国だったし、余りにも異質なものに囲まれていたから、想像力がなければ、生存が不可能だということもあった。また、その想像力が間違っている場合、ひどい困難に陥ることで、自分の誤りを認めざるを得ないということもあった。

比較的同質なものに囲まれていると、日常生活で、想像力がなくてもあまり困らないので、想像力が貧しくなる。そして、そういう癖がついてしまうと、異質のものに入っていくのがだんだん億劫になってしまう。

日本に帰って来てから、私は驚くほど多くの発見をしたような気分だった。かつて習慣的にやっていたことの意味が突然見えて来てはっとしたものだ。かつて異国で、彼らが習慣的にやっていたものの意味を、苦勞して考え込み、やっと理解したのだが、母国の不可解だったいろんな謎が急にすらすら解け、その昔苦しんでいたことがやわらかく慰撫されるような感じもあった。多分、ある年齢に達して、幼い頃をふり返って見たときに、ふっと見えてくるものがあるのも、いつの間にか異った人間とかかわりあったことの証明なのであろう。

十五年昔のことはなつかしいが、さりとてそこに帰ってみたいというのでもない。同じことを二度やるのはつまらないという気分である。

文学的

二十代から三十代にかけて十年余り、私は文学を専門にしている友人を全く持たなかった。食べるためだけに、自分は決して満足しているわけでもない仕事を、熱心に真面目にしている人びとの中で暮していた。自分も教師をしていたが、熱心に真面目になれたのは、どこを見まわしても似たりよったりのそうした仕事をしている人びとの哀しみの絡み合うものの中で、生きているような気がしたからであらう。

サラリーマンは自分の勤めている会社の中で、役人は役所で、商人は商売で、教師は学校で、それぞれに自分の属している機構の中で、少しでもよい地位を得ようとして、あるいは幸せになろうとして、けなげな努力を続けていた。

野心的な者も、野心的でない者もいたが、一樣に、違った角度で自分を含めた人間を眺めていることには変りはなかった。

彼らが自分のたずさわっている仕事に、ほんとうに意味を認めていたかどうかは疑わしいが、

多かれ少なかれ、そこから逃れられないことだけはよく知っていて、ささやかな歓びを、まわりでゆっくり動いていくものの中で確かめようとしていた。

彼らはいつも他人のことが気になり、他人の中にこそ自分の存在の意味があるように感じていた。自分が何かを欲すれば、それは他人にとっても無関係ではないというようなことである。従って、他人の欲望にも非常に敏感であった。

彼らは小説などめったに読まない人たちであった。彼らの言うことの多くは即物的で、自分の肌で感じたようなことばかりであったので、無意識的に文学的であった。文学のことは何も知らなかったので、余計に文学的だったのである。

小さな町で、住んでいる人たちの主だった顔ぶれはみんな身元のわかるような間柄だった。祖先のことや、本人の趣味、子供たちの性向、周囲の評判なども大方通じ合っていた。

病気になるって入院すれば、誰かが必ず見舞いに来、郵便局に行っても、銀行に行っても、店に入っても、窓口で応待する人たちはどこかで顔を合わせたような人ばかりであった。

つながり合っているものの非常によく見える、社会の原型めいたものの手ざわりのある暮しがそこにはあった。

私たちは毎日のようにボートで海に出た。夏は北国の白夜で、夜の十二時まで釣糸が見えるのである。鯨がいて、仔を背負った熊が泳いでいたり、島に渡る鹿の姿が波間に見えるような海であったが、すれ違うボートは大抵、誰の舟か見分けがついた。手をふって、どの岬、どの入江の